Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 異文化間交流の実践的研究 : 滞日留学生と日本人の会話における相互行為分析 |
| Author(s) | 吉川, 友子 |
| Citation | 大阪大学, 2004, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/45763 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【7】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 吉川友子（よしかわともこ） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（言語文化学） |
| 学位記番号 | 第　18961　号 |
| 学位授与年月日 | 平成16年6月28日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当<br>言語文化研究科言語文化学専攻 |
| 学位論文名 | **異文化間交流の実践的研究：滞日留学生と日本人の会話における相互行為分析** |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教　授　津田　葵<br>（副査）<br>教　授　村岡　貴子　　助教授　山下　仁 |

## 論文内容の要旨

異文化間交流とは何か。異文化間交流を目的とする集まりにおいて、人はどのように他者と関わっているのであろうか。本論文では、高等教育のため一時的に日本に滞在する滞日留学生（以下留学生）と一般の日本人たちが、交流を目的として集まる会合に焦点を当てた。異文化間交流の実践的研究とは、異文化間交流あるいは国際交流を目的に掲げて開かれる集まりをひとつの社会と見なし、そこにおける言語的非言語的な会話行動を録音録画して分析することによって、人々が実践している異文化間交流を捉え、その方法を明らかにする研究である。したがって、本論文の研究対象は人間と人間とが出会う場における人々の振る舞いであり、ここには留学生と日本人によるやりとりも日本人同士によるやりとりも含む。

留学生に関するこれまでの研究では、言語能力、コミュニケーション能力、異文化適応などが論点とされており、実際の交流活動の場面を詳細に分析した研究はこれまでほとんど行われていなかった。本論文では留学生を社会のメンバーとして捉え、人と人との出会いという側面から取り組んだ。

本論文の目的は、異文化間交流を目的とする多人数参加の相互行為において、実際のデータの分析を通して、①話し手と受け手といった参与者関係がどのように構築されているのかを明らかにし、②参与者が自己をどのように表示し他の参与者をどのように位置づけるのかを解明することである。さらに、③そのような点に密接に関わっていると考えられる意図され達成される行為と言語的非言語的道具立てを明らかにすることである。

研究の方法論としては、エスノメソドロジーの枠組みで会話分析に基づく相互行為分析を援用した。エスノメソドロジーとは、ある社会において人々が日常の行為をするために使用する方法を解明する社会学的方法論である。実際の会話を録音録画し、人々が特に意識しないで行っている日常の振る舞いがそういった状況の中でいかに理にかなっているかを分析、記述するもので、コンテクストを重視するアプローチと言える。エスノメソドロジーには自然会話のシークエンスの形式的組織化の問題と、会話の内容に現れるカテゴリー化の問題というふたつの主な論点がある。この両方の論点に同時に目を向けるような研究は、特に異文化間交流を目的とする多人数会話を扱ったものでは、ほとんど見あたらない。また、日本の文化社会において開かれ、異文化間交流の目的を持つ交流会という社会文化的制度的な制約を受ける対象を扱うため、その状況やその参与者集団によって生まれるミクロ・コンテクストばかりでなく、マクロ・コンテクストの影響を考察することが必要になる。

したがって、本論文ではまず、主にミクロ・コンテクストによる会話のシークエンスの形式的組織化を論じることによって、話し手および受け手を中心とする参与者関係を分析した（4章）。つぎに、マクロ・コンテクストの影響も考えられるカテゴリー化について分析を行った（5章）。さらに、実際のコミュニケーションにあたっては、表現の言い換え、場面や進行中の事実を名前付けすることなど、何らかのやり方で受け手が対象を理解できるようにはっきりと表現する行為、すなわち定式化が行われる。本論文では、この定式化にも焦点を当てた。（6章）。このような観点からの研究分析では、Goffman（1981）の参与者の枠組みに関する概念、Sacks（1972a, 1972b, 1984 & 1992）によるカテゴリー化の諸概念、および、Goodwin & Goodwin（2004）などに提唱される受け手の行為や非言語行為を重視した相互行為分析の考えを取り入れて議論を進めた。

参与者関係の分析から明らかになったことは、まず、「直接話しかけられる受け手」というステイタスをめぐって、承認された受け手の間で争奪関係が起こり得ることである。また、参与者関係が主に受け手側の行為を手がかりとして構築されていた。これはどちらも、受け手が関心を持って聞いていることを話し手に示し続けることに起因する。ここから、異文化を代表する者を中心的な話し手として位置づけることが異文化間交流の集まりにおける前提的な秩序として存在していることが明らかになった。

その秩序に沿って、多人数会話における相互行為を円滑に進めるための道具立てが以下のように見られた。参与者、特に受け手の意図は、視線や顔の向きなどの身体的行為およびあいづちなどに表示されていた。また、協働発話が参与者の間に連帯感をもたらしていた。協働発話の文の正確さや適切性が不的確であったとしても、連帯感の表明は参与者たちの様々な方策を経て高められていた。社会文化背景や知識経験の異なる参与者同士においても、理解し共感し合うために協働発話が行われており、発話内容の正否に関わらず協働発話や笑いなどの行為をともに行うことそれ自体が、連帯感の共有という点で重要なものになっていた。さらに、このような協働話者性を利用すれば発話権を得やすく、ターンを持続しやすいことも示唆された。発話権の獲得やターンの保持には、接続詞「（それ）で」や先行話者への同意を表すマーカーである「そう」がさらにその効果を高めていた。以上の道具立ては、言葉とともに非言語的行為が使用されることによって、効果を十分に得られるものであった。

カテゴリー化分析からは、自己の表示や他者の位置づけに関する結論が得られた。まず、カテゴリーメンバーとしてのアイデンティティをもって表示される社会的役割や固定的な異文化性が存在する一方で、必ずしも固定的ではなく、話し手の語りの心的立場の変化によって距離や親近感が逆転する可能性を持つ異文化性も見られることがわかった。また、ひとつのカテゴリー集合は、さらに下位分類可能な多様なカテゴリーをその中に含んでおり、カテゴリーメンバーとして持つ知識の違いが影響して下位分類が起こることが解明された。さらに、カテゴリーに対する価値観の評価は社会文化的背景の異なる参与者の間でも適切に伝えられており、それによって受け手の共感を得た話し手は、活発な参与を続けて中心的コミュニケーションを維持することができていた。

このような分析を通して、つぎのようなことが明らかになった。異文化間交流とは、自分を表示すると同時に多様な他者の表示に柔軟に目を向け、あるいは共通する要素や共有できる価値観を認識することによって、理解し合おうとする人々の集まりである。カテゴリーを同じくすることや異なっていることは、コンテクストに沿って現れた個人の一部に過ぎない。これまで、国際交流あるいは異文化間交流と呼ばれる活動において、「日本人」と「外国人」というカテゴリー対にばかり焦点が当てられ、国や国籍を背景にした異文化性ばかりがもてはやされすぎてきた嫌いがある。「異文化間交流」や「国際交流」という言葉に「多文化」をイメージするのとは全く逆に、人々は国や国籍によって隔てられ、非常に限られた文化観、価値観の中に押し込まれていたというイメージではなかっただろうか。また、異文化を背景にして異なるカテゴリーにあると見られる者同士は、文化的な観点や生活様式の違いから、異なる価値観を持っていると見られやすかった。しかし、本論文の分析から、つぎのように言うことができる。このような参与者たちは、実はコミュニケーションを進めていく上での価値観を共有している。快適にコミュニケーションが運ばれていないような状況においては冗談を言い合うといった方策を駆使しながら、協働的に相互行為に関わっていることは明らかである。

定式化の分析からは次のようなことがわかった。他の受け手に定式化を要請することは、参与者が中心的コミュニケーションにおける話し手になるための一つの手段であった。一方、他者の発話の自発的な定式化は、定式化が適切であるとされた場合は中心的なコミュニケーションに組み込まれ、逆に、受け入れられない場合は目的を達成しない

うちにフロアを失っていた。自分の発話や行為を定式化する話し手の例では、自分の所属カテゴリーを正確に受け手に伝え、アイデンティティを表示しようとする話し手の志向が現れていた。このようなことから、定式化が多様な行為を達成し、機能する可能性があることが示された。また、直前の発話を定式化するだけではなく、以前に使われた他者の発話や行為をリソースとして無標で再利用し、先行する他者の発話や行為を定式化することも解明された。さらに、定式化をその後のシークエンスにおいても繰り返し再利用し、参照し、発話権を獲得したり自分の意見を主張し続けるために利用していること、および、定式化が再利用される場面でそれが交流の存在意義を脅かす危険性を伴うとき、断定的な否定を避けることや中心的なコミュニケーションから降りることによって、その危険性を回避するための様々な方策がとられることが明らかになった。

以上、本論文では、異文化間交流の集まりにおいて、異文化を代表する者を中心的な話し手とすることが前提的な秩序として存在することが明らかにされ、その一方で、多様なカテゴリーを駆使して自己を表示し、他者を見つめ、発話や非言語行為に多様な行為を込めながら、協働的に相互行為に携わる参与者の姿が浮かび上がってきた。異文化間交流がこのようにダイナミックな諸相を持つことは、会話のシークエンスの形式的組織化の分析だけでも、あるいはカテゴリー化の分析だけでもわからなかったと思われる。本論文のようにこの両面を見て、さらに、定式化という行為に関する分析によって分析結果を深めることによって、異文化間交流の実践が解明できたのではないかと考えられる。

しかしながら、本論文には残された課題もある。この研究の分析からは非言語行為の重要性を確認することはできたが、分析方法論的な議論は十分にはできなかった。「相互行為の社会言語学」など、文化的側面や非言語的側面を分析に含めたモデルの研究枠組みをさらに考察することが望まれる。また、参与者の属性、知識、あるいは広く文化という社会文化的なコンテクストをどのように扱い、分析の枠組みを提示するかについての考察も必要であろう。さらに、生のデータを的確に録音録画する場合の具体的な改良点を見つけることも急がれる。このような点を考慮に入れながら、今後の課題として、さらに研究を続けていきたい。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、滞日留学生と日本人による異文化間交流目的の集まりを人と人との出会いの場として捉えエスノメソドロジーの枠組みで参与者関係（Goffman 1981）、カテゴリー化（Sacks 1992）、定式化（Garfinkel and Sacks 1970）といった観点から会話分析を行ったものである。会話はコンテクストを構成するという考えから、会話分析では近年、非言語的側面をも射程範囲に含めている。本論文でも多人数会話を扱うにあたり、言語的非言語的両側面からの分析を試みた。

参与者関係の分析では、参与者関係が主に受け手側の行為を手がかりとして構築され、その受け手の間にもステイタスをめぐる争奪関係が起こり得ることが明らかにされた。ここから、視線や顔の向きなどの身体的行為、あいづち、協働発話などの道具立てにより、異文化を代表する者を中心的な話し手として位置づけるという秩序を参与者が維持していることが明白になった。

カテゴリー化分析からは、異文化間交流が自己の表示だけでなく、状況によって選択、表示される多様な他者のカテゴリー化に目を向け、理解し合おうとする人々の集まりであることが浮き彫りにされた。また、様々な社会文化的背景を持つ参与者たちがコミュニケーションを進めていく上での価値観を共有し、冗談などの方策を駆使しながら協働的に相互行為に関わること、異文化間交流の多様性がステレオタイプ的な異文化性にとどまらないことが解明された。

定式化の分析からは、これまで見過ごされていた定式化行為の多重性・重層性が明らかになった。すなわち定式化は、発話権を得てフロアを維持するための手段として機能する一方、アイデンティティを表示して受け手に伝える行為でもあった。また、他者の声を利用した無標の定式化に注目することによって、定式化が多様な行為を達成すると同時にさらなる定式化のリソースとなり、繰り返し再利用、参照され、さらに多様な行為を達成してゆくことが判明した。

以上の分析を通して、これまで言語能力、コミュニケーション能力などが議論の中心になってきた留学生が、会話という振る舞い行為においてはダイナミックにコミュニケーション活動に従事していることが明らかになった。こういった研究と密接に結びついている相互行為の社会言語学的方法論の検討、データ収録方法の改善、それに基づくより包括的な分析といった課題が残されているとはいえ、言語的非言語的両側面からの会話分析的手法を取り入れたこと、これまで解明されてきた会話の諸原則が異文化を背景にした多人数会話においても成り立つことを実証したことの意義は大きい。よって、審査委員会は本論文を言語文化学博士論文として十分に価値あるものと判定した。